月刊 Gekkan fetinove 2013 7月号

フェチノベ

あの！
狐っ娘の九尾に
飛び込みたい！

小説

神楽遊び
カムケン

人外娼館の管理人
十二屋月食

魔界王国ヴェルマギア
トラム・デル

お食べ退魔録
注文の多い調理師

Gooey and Sticky
六病

スキュラとドタバタ
エロエロにゅるにゅる生活
沈黙の天使

大江戸妖怪恋噺
たんがん

挿絵
フラットライン
たけなわ

表紙　フラットライン

R18
Adult Only

神楽遊び
カムケン

4話　愛玩

そこは見るからに広大な敷地であった。周囲を覆う垣根がそれを物語っていた。
龍馬と巴は門にたどり着くと、呆然と立ち尽くす。
「ふふ……今更、怖気ついたのではあるまいな？」
玉藻様が笑って言う。
「いえ、そんな事ないです。ただ、立派なお屋敷だと思ったので、唖然としてしまいました」
「そうかのぉ。少々、小さいと思うのじゃが」
玉藻様の表情から察するに、本当に不服そうであった。
「以前はこの倍以上のお城に……」
その冗談になぜか玉藻様はお松さんの頭を小突く。
それに対してお松さんは舌を出して笑う。
「早く開けるのじゃ馬鹿者」

「はい～はい～」
お松が門の前に垂れ下がっている紐を三回引くと、どういう原理か扉が大きな音を立てて、開いていく。
「では～ご案内いたします」
扉が開かれると、大きな庭園が広がっていた。橋がかかった池、整えられた植林、周囲には色とりどりの花々が植えられている。
ボクと巴を高額で買うぐらいだから金持ちだとは思っていたけれど。まさかこんなに広い土地を持っているなんて思ってもいなかった。
「ふむ……先に綺麗にしておいた方が良いかのぉ」
玉藻様がボクの身体を見聞するかのように見ると、クンクンと犬のような匂いを嗅ぐ。
確かに今のボクはしばらくお風呂に入っていなかったから、匂いそうだが、小汚いように見えるかもしれない。
「あの……」
ボクは少し恥ずかしくなって玉藻様から目を逸らす。
「お松、龍馬を綺麗にしておくのじゃ。丹念にな」
「はい～はい～」
お松さんがボクを抱え上げると、物凄い勢いで駆けていく。
玄関の戸を開け、廊下を駆け、暖簾のかかった部屋へと勢い良く入る。
「ここは？」

棚や椅子などがあるが、家具らしい物は全く無い簡素な部屋のように思えた。しかし、この部屋の造りは何処かで見たような……

「では～脱ぎ脱ぎしましょうね～」

そう言ってお松さんはボクの着物の帯を解き、脱がし始める。

「ちょっと待ってください!? まだ、ボクは心の準備が!?」

まさかボクは汚いからお松さんに回されたという事だろうか？

「お風呂嫌いなんですか？ ばっちい人は嫌われてしまうでございますよ」

お松さんがボクを真っ裸にすると、笑って言う。

「お風呂？」

そうか……ボクを綺麗にする為にお風呂に入れるつもりだったんだ。

「はい、そうですよ～一緒に入りましょうね」

ボクの剥き出しの大きくなりかけた肉棒を気にせず、お松さんは手を引き、風呂場へと向かう。

木戸を開けると、山の景色が広がっていた。浴槽は敷き詰められた石を円形で囲んだ露天風呂、その周囲には桜と紅葉が植えられ、緑の葉と桃色の花弁が待っていた。天然温泉なのか、竹製の筒からは絶え間なく湯が出ていた。

「これがお風呂……凄いですね」

この時代のお風呂というと、五右衛門風呂や檜風呂のようなものを想像していたのだけれど。

「では、横になってくださいまし」

「えっ？」
聞き違いたのだろうか？　お風呂は普通、横になるものではないのだけれど。
「こっちでございますよ。龍馬さん」
浴槽に向かおうとすると、お松さんに手を引かれ、簀の子にうつ伏せに寝かされる。
「な、何をするんですかお松さん？」
異常な態勢に不安を隠しきれない。
「身体を洗うのでございますよ龍馬さん」
後ろに顔を向けると、繭のような物を持つお松さんの姿があった。繭はスポンジのようで、お松さんが揉むと、泡が立ち込める。
「それ……なに？」
「八十女（やそめ）さん……つまりは土蜘蛛さんの糸で作った手ぬぐいでございますよ～絹のような肌触りで、気持ち良いのですよ～」
お松さんはそう言って蜘蛛糸の手ぬぐいに石鹸を擦りつけ、泡を増やしていく。
「じ、自分で洗いますよ……子供ではないので大丈夫です!?」
嫌な予感がして逃げようとするが、お松さんの押さえつける力が尋常ではなく、脱出は不可能であった。
「駄目でございますよ。手の届かない所までちゃんと綺麗しなくちゃいけませんからね」
「でもですね……お松さんのせっかくの着物が汚れててしまいます」
とは言ったものの、お松さんは既に着物を濡れないようにたすきがけしており、準備万端であった。

「大丈夫でございますよ。ちゃんと濡れないように工夫をしておりますので」
「あれ？」
「では～洗いますね～」
「ひゃっ!?」
蜘蛛糸の手ぬぐいが肩に触れ、ボクは妙な声を出していた。
大袈裟かと思うが、その感触はスポンジより柔らかく、毛皮のようにふんわりしているのだ。それに加えて石鹸の肌を伝うぬるぬる感が快感を与えていく。
「おとなしくいてくださいませ。洗えませんので」
「止めてよ!?　一人で洗えるのに……」
そう言っても止めてもらえず、お松さんは脇腹、背中、お尻、足へと手ぬぐいを滑らせ、念入りに洗っていく。
「ここも綺麗にしないといけないですね」
「えっ？」
お松さんの蜘蛛糸の手ぬぐいが尻の穴へ触れる。
「中も綺麗にしますね～」
そして蜘蛛糸の手ぬぐいがボクのアナルへと突き込まれる。
「ひぎいっ!?」
石鹸のぬめりで、柔らかい蜘蛛糸の手ぬぐいがずぶずぶと尻の穴に飲み込まれていく。痛みは無いが、妙

な異物感と不思議な快楽がボクの中に駆け巡った。
「あら～。大きくしちゃいましたね」
ボクの股間にお松さんの指が肉棒に触れる。
お松さんはさらに肉棒を確かめるように撫でさすってくる。
「……止めてください……」
「どうしてですか？　気持ち良いんじゃないんですか？」
「こんなの……普通じゃありません！」
「そうなんですか？　こんなに大きくしているのにですか？」
「こ、これは違います！」
「何が違うんですか？」
ボクはお松さんに仰向けにされ、その大きくなった肉棒を見られてしまう。
「ボクは玉藻様と……」
「玉藻様に愛撫されるのですから、ちゃんと身を清めていただかないと失礼でございますよ。じゃあ、前も洗いますね～」
「えっ？　前も!?」
お松さんの手によって全身を泡塗れにされていく。
「気持ち良いですか？」
「……はい」

その答えでお松さんは満足したのかと思ったのだけれど、手ぬぐいを持つ腕が肉棒に触れる。
「ここも綺麗にして差し上げますね～♪」
「止めてください……!?　そこは!?」
大きくなった肉棒に蜘蛛糸の手ぬぐいを滑らせる。まるで汚れた物を落とすように、ごしごしと擦り始める。
泡のぬめりと手ぬぐいの感触が全身を快感に導かせボクは……
ドピュッ!?　ドピュッ!?　ドピュッ!?
ボクは射精していた。勢い良く飛び出した精子はお松さんの手から胸、顔を汚していたが、それを気にする事なく再び、肉棒洗いを開始していた。
「また汚れてしまいましたので、洗い直しですね♪」
「ひいいっ!?」
まるでボクは風呂嫌いの犬のように暴れるが、肉棒の洗いの快感が次第に抵抗できなくなっていく。
「たまたまもちゃんと綺麗にしないといけませんね」
そう言ってボクの二つの玉がころころ転がされ、洗われる。
「玉、止めて！」
「そうそう、亀頭の方もよく念入りに洗って差し上げますね♪」
そう言ってお松さんは亀頭部分を手ぬぐいで包み込むと、蛇口をひねるような動作で擦り始める。
「ああっ!?　いっちゃう……いっちゃうよおおっ!?」

「全て出してくださいまし。その汚らしい汁を出し、身を清めるのでございます」
ドピュッ!?　ドピュッ!?　ドピュッ!?
ボクは耐えられずに射精し、また汚してしまった。お松さんの上等な着物が白く汚れ、罪悪感を感じる。
「ああ……」
「あら、あら、また洗い直しでございますね」
お松さんはそう言いつつも、嫌そうな顔をせずにボクの精子を泡で落としていく。
「止めてください……こんなの凄く汚いです」
「汚いから洗うのでございますよ」
今度は手ぬぐいで肉棒全体を包み込むと、火起こし棒のように回転を加え始める。
「はうううっ!?」
ドピュッ!?　ドピュッ!?　ドピュッ!?
再び、射精する。お松さんが白く汚れていくが、もはや罪悪感も無くなっていた。
「あら〜。また汚してしまいましたね」
「こんなの……意味ないよ」
「精子が無くなるまで洗って差し上げますので、大丈夫でございますよ」
「ひいいいっ!?」
今度は手ぬぐいと泡の付いた手での入念な洗い、隅々まで擦るような動き。亀頭の周りから溝の部分まで洗われボクは……

ドピュッ!?　ドピュッ!?　ドピュッ!?
「あらあら、龍馬さんの白いのでベトベトです」
まるで冗談のように白くなった着物を見せびらかすお松さんにボクはまた罪悪感に苛まれる。
「……ごめんなさい」
「大丈夫でございますよ。汚れたらまた洗えば良いのでございますよ」
「はううう!?」
ぬるぬるの泡塗れの手ぬぐいまたボクの肉棒を包み、快感を絶頂に導かせる。
ドピュッ!?　ドピュッ!?　ドピュッ!?
何度目か分からない射精で、ボクは糸の切れた人形のように全く身動きできなくなってしまった。そしてお松さんに股間を洗われても、もう何も出なくなっていた。
「すっかり出なくなりましたね♪　では～次こそはしっかり洗って綺麗にして差し上げますね」
もう射精できなかったものの、洗いの手は止まらず、快感が未だにボクを支配していた。ボクは抵抗できず、感情の無い瞳でお松さんを見つめていた。

その後の記憶が全くない……温泉に入れたかどうかすら覚えていなかった。
広い居間でボクは座椅子に寄りかかったまま、ぼうっと天井を見上げ続けていた。

「おい、おい、大丈夫か？」
男性の声が聞こえ、ボクは反射的に前を向く。
いつの間にか入って来ていたのか、対面する座卓に黒装束の少年が居た。
その少年も人間ではないようで、犬の耳と尻尾が生え、胸元からは黒い毛皮が見える。
「貴方は……？」
「山狗って言うんだ。よろしくな」
握手を求められ、それに応じるが……この時代で握手は違和感を感じるのだけれど。
「山狗さん？　ボクは才谷龍馬です」
「龍馬か、強そうな名前だな。これ、やるよ」
懐から取り出したのは手の平サイズの瓢箪であった。
「何ですか？」
「飲んでみろ。元気になるぜ」
ボクは瓢箪の栓を抜き、中の液体を飲んでみる。
辛い……カレーやスパイスのような辛さではなく、炭酸ジュースを濃縮したような刺激と薬っぽく、妙に甘い。
「ごほっ……!?　何ですかこれ!?」
「がははははっ!?　滋養強壮薬だ。精も体力もつくだろ？」
「滋養強壮薬ですか……」

確かに疲れきった身体が妙に軽く、楽になった感じがする。
「お前の連れ……巴だっけ？　どういった関係なんだ？」
ボクはその質問にギクリとした。巴とは幼馴染なのだけれど、玉藻様が嫉妬深い方だったらこのように誰かを通して聞きにきてもおかしくないかもしれない。
「巴とは幼馴染で、たいした関係ではないんです」
「じゃあ、巴とはやっても良い訳だな？」
「えっ？」
その質問にボクは首を傾げる。
『逃げないでくださいまし！』
『他人にお股、洗われるなんてまっぴらごめんよ！』
廊下からドタバタと駆ける音と共に、巴とお松さんの声が聞こえる。
襖を開け、素っ裸の泡塗れの巴が入って来る。
「龍馬！　ここから出るわよ！」
巴と山狗の目が合う。
「お前が巴か？　俺が洗ってやるよ」
山狗は巴の裸に臆する事なく抱きしめる。
「な、何よあんた!?」
「山狗さんが洗ってくださいますと、助かります」

「今日から俺がお前の男になる」
「はっ？　意味分かんない！」
そう言いつつ、頬を染める巴に山狗はお姫様抱っこしてしまう。
「山狗さん!?」
思わず立ち上がる龍馬に山狗は視線をこちらに向ける。
「ちょっと……離しなさいよ！　龍馬、助けて！」
暴れる巴を助けようとも思ったが、ボクは躊躇する。ここで助けようとしたら巴を好きという事になってしまわないだろうか？
「なるほどそういう事か……なら、ちゃんと好きな奴を決めておけよ。じゃないと、後悔する事になる」
「あの……ボクは……」
「巴の処女はとっておくが……ここに残るなら考えとけよ」
そう言って山狗さんは巴をお姫様抱っこしたまま、居間から出て行ってしまう。
「巴が……」
『少し格好良いからって私をどうにかできるなんて思わなっああ……！』
廊下から巴の悲鳴のような声が響く。
「大丈夫でございますよ。山狗さんも男ですし、とって喰いはしませんよ」
「山狗さんが男なら違う意味でとって喰われるんじゃ……」
今のボクは少し青ざめた顔をしてるのではないだろうか？　幼馴染がレイプされるかもしれないのだ。気

が気でない。けれど、なぜかは分からないが、巴の処女をとっておくという山狗さんの言葉は信用できるような気がした。

「勇気さん。伽の準備ができているでございますよ」

ボクはお松さんに連れられ、二階の部屋へ通された。

お松さんが襖を開けると、そこに玉藻様が居た。着物は着ているものの、胸や股間部分をはだけさせ、玉藻様は敷かれた布団に座り、いつでも行為できる状態である。

「では～ごゆりると～」

襖を閉めてお松さんが行ってしまう。

「えと……」

ボクが戸惑い、呆然と立ち尽くしていると、玉藻様が手招きする。

「何よぼうっと突っ立ておるのじゃ。ちこうよれ龍馬」

優しい物言いで玉藻様に言われ、ボクはちょこんと布団に座る。

「失礼いたします」

玉藻様と対面する。もう玉藻様と手と手が触れる位置にいるのだ。

「ふふ……では、何からいこうかのぉ？」

玉藻様がボクの着物の帯を解いて、重要な部分だけを露出させる。このままやるという事なのだろうか？ボクや玉藻様が着ている着物は高級そうだ。お松さんの着物のように汚したらまずいのではないだろうか？

「……キスからでどうでしょうか？」
「キスで良いのか？」
玉藻様が抱き締めると、ボクにキスをし、大胆にも舌を突き入れる。
「……あっ!?」
舌と舌を絡ませ、唾液を循環させる。玉藻様の甘い唾液でボクはトロトロに蕩けていく。
「……んむっ……」
玉藻様が口を離すと、唾液の糸を引いた。
ボクが寝転がると、ぬるっとしたものに手が触れる。
「えっ？　あれ、これは……？」
桶に入った液に触れたのか、手がぬるぬるになっていた。
「椿油じゃ。尻尾を整えておってのぉ。龍馬も試すかや？」
玉藻様は悪戯な笑みを浮かべ、その立派な九尾を揺らす。椿油でぬめった九尾はてらてらと光り、まるで触手のようだ。
「まさかボクをその尻尾で……」
躊躇していたものの、身体は正直のようでボクの肉棒は大きく反り立っていた。
「龍馬、どうして欲しいか言うみるのじゃ」
「でも……せっかくの着物が汚れてしまいます」
「着物などいくらでも進ぜよう。わしはそなたの気持ちが知りたいのじゃ」

「その尻尾で……ボクを犯してください」
もじもじとするボクに顔をしかめる玉藻様。
「聞こえぬぞ！　どうして欲しい？」
「その尻尾でボクを犯してください！」
「ふふふ……ちゃんと言えるではないか。では、このわしの自慢の九尾で龍馬を犯してやるかのぉ」
玉藻様の九尾が前に伸び、ボクの身体を覆い尽くしてしまう。
「ああ……玉藻様のもふもふ尻尾が……」
もふもふの九尾がボクの身体の隅々まで蹂躙していく。椿油のせいか、刷毛でタレを塗りたくられているかのような感覚。それが股間にまで入念に椿油が塗りたくられ、快感が電気のように駆け巡る。
「もう……耐えられません！」
「良いぞ。その活きの良い子種をたっぷりと出すのじゃ」
ドピュッ!?　ドピュッ!?　ドピュッ!?
ボクは勢い良く射精し、玉藻様のもふもふの九尾や上等な着物を白く汚してしまった。
「ご、ごめんなさい!?　立派な尻尾や着物を汚してしまいました」
「気にするでないと言っておるのじゃ。次じゃほれ」
「あうっ!?」
玉藻様の九尾がボクの手足や肉棒に巻き付き、拘束してしまう。
「着物を汚すなと、生意気な事を言った罰じゃ」

「ええっ!?　そんな……」
九尾が手足や肉棒をぐるぐる巻きにし、徐々に力強く締め上げていく。
「や、止めてください!?」
「苦しくなかろう？　その為に入念に尻尾に椿油を塗ったのじゃ」
苦しくはない。けれど、もふもふの尻尾は真綿で締められているというより、濡れた筆の毛先で縛られているようであった。しかも、蛇のようにとぐろ巻く尻尾のせいで、快感が絶頂に達しているのに射精できない。
「出させてください……このままじゃ壊れちゃいます」
「もう少し我慢せい」
「……そんな……」
尻尾を巻き付かせまま、毛先が器用にも亀頭部分を弄ぶように這い回ってくる。
「生殺しというのも悪くなかろう？」
「出させてください！　玉藻様！」
肉棒に巻き付いた尻尾が緩み、上下させられて快感が絶頂に達した。だが、根元はまだ巻き付いたままで、またしても射精に至らない。
「ほれ、出さぬのか？」
「酷いです……玉藻様」
涙目のボクに玉藻様の柔らかい手が頭を優しく撫でる。

「すまぬのぉ。龍馬は可愛いからすぐ虐めたくなってしまうのじゃ」
「出させてください！　お願いします！」
「ふむ、しかたないのぉ。ほれ」
玉藻様は根元を締め付けたまま、尻尾を素早く上下させる。まるで溜まっていたものを全て出し尽くそうとしているかのようだ。我慢汁が漏れ出て、尻尾の締め付けでも抑えきれない。
「はううう⁉　ちょっと待ってください！　まだ心の準備が⁉」
「では、ゆくぞ」
玉藻様が九尾を緩めると、射精に至った。ボクの精子がシャワーのように降り注ぎ、玉藻様の顔や九尾、着物を白く汚していく。
「あう……もう駄目です……」
ボクはふにゃふにゃになって布団に倒れこむ。
「龍馬の子種は暖かくて気持ち良いのぉ」
玉藻様は白く汚れた身体を気にせず、顔や着物に付いた精子を手ですくって、美味しそうに舐め取っていく。あれ？　ボクを見つめたままの玉藻様からはまだボクに性交を求めているような……
「疲れました……もう寝ても良いですか？」
「何を言っておるのじゃ。これからが本番じゃぞ」
「えっ？」
その玉藻様の言葉にボクは聞き違えを願った。

「わしの筒がこんなにも濡れ濡れなのじゃ。どうしてくれる？」
そう言って顔を跨ぐように見せつける玉藻様のおまんこは、いつ愛液が溢れ落ちてもおかしくないような状態であった。
それでもボクのおちんちんはうな垂れたままで、とても性交ができるような状態ではない。
「ごめんなさい……できそうにありません」
「ほれ、舐めるのじゃ」
玉藻様のおまんこが顔に近づけられ、それをぎこちなく舐め上げる。
「んむっ……玉藻様の狐汁、美味しいです」
ペロペロと舐めているものの、玉藻様は納得していないようで、ボクを不満そうな顔で見下ろす。
「どうじゃ？　元気になったか？」
確かに玉藻様の狐汁は美味しいけれど、これだけで元気になる訳が……って、あれ？　ボクのおちんちんがしだいに大きくなっていくような……
「ああ!?　どうなってるの？　ボクのおちんちんが大きくなって!?」
「当たり前じゃ。妖神の愛液は人を魅了させ、精気を高めるのじゃ。精気が無くなるまで吸い取ってやるかのぉ」
「ちょっと待ってください玉藻様!?」
「待てぬ！」
勃起したボクの肉棒に勢い良く玉藻様のおまんこが沈み込む。

「ああっ!?　玉藻様のがボクの中に入ってるううう!?」
愛液で満たされた筒はドロドロで、ぬめりですぐに子宮に到達した。
「おおっ!?　良いぞ！　そなたの太刀はわしの鞘にふさわしい！　良い感じに収まるのじゃ！」
「ボク……もう限界です！　玉藻様ああああっ!?」
「良いぞ！　わしの筒をその濃厚な甘酒で満たすのじゃ！」
ドピュッ!?　ドピュッ!?　ドピュッ!?
ボクは玉藻様の膣に射精していた。
玉藻様のおまんこから精子と愛液が漏れ出たのか、ボクのお股を濡らす。
「ボク……幸せです……玉藻様と繋がれた事で……もっと分かち合えました……そんな気がします」
「ほう……面白い事を言う小僧じゃ」
それからの事は覚えていない。あの後もずっと性交をやり続けたのか、それとも眠ってしまったのか……今回ばかりは体力が無い自分が情けなく思う。それでもボクは玉藻様と繋がって一つとなった。それが幸せだった。

次の朝、ボクと巴は連れて行きたい場所があると玉藻様に言われ、森へと連れて来られた。
「ハイキングいや、登山ですか？」

「そなたらが一日、愛玩となれば自由にすると言ったであろう」
確かにそういう約束であったのだけれど。ボクの気持ちは玉藻様から離れられないでいる。
「そ、そうですよね……」
「不服そうじゃのぉ。まるで愛玩にしてくれと言っているかのようじゃ」
歩きながら顔を覗き込む玉藻様に巴が割って入って、ボクを引き離す。
「約束は守って貰うわよ！」
「冗談じゃ。では、ここで良いかのぉ？」
気づけばいつの間にか、獣道のような場所に入っていた。他の妖神に目につかない為の玉藻様の配慮なのだろう。
「では～旅の品でございます。お役立てくださいまし」
そう言ってお松さんが差し出したのは大きな風呂敷に包まれた物だった。重箱のような形と食べ物の良い匂いから察するに、恐らくはボク達の為に作ってくれていた弁当なのだろう。
「ありがとうございます」
「それと龍馬、巴、これを付けておくのじゃ」
渡されたのは革製の首輪だった。それには何か文字のようなものが細かく刻まれている。
「何よ！　これを付けて戻って来いって言うの？」
巴が睨むように言う。
「望めば戻って来ても良いじゃろう。じゃが、そういった意味ではない。これは人間が自由に歩く為の手形

のようなものじゃ。これがあれば捕まって家畜になる事や他の誰かの愛玩になる事は無いはずじゃ」
「ちょっとふざけないでよ！　本当に愛玩動物になったみたいじゃない!?」
「ありがとうございます」
ボクが躊躇なく首輪を着けると、巴もしかたなく従った。
「龍馬、お前の話してくれた蛇の妖神の父の話なのじゃが……恐らく和合にいると思うのじゃ」
ボクは玉藻様に清姫の父の話をしていた。もし、藤原リョウという龍神を知っていればと思ったのだけれど。
「和合ですか？」
「黄泉国では妖神と人間が交わって子供を作るのは禁忌されておるのじゃ。じゃが、人間と妖神が共に暮らす和合国なら有り得るかもしれぬな。この獣道を真っ直ぐ行くと……」
「ボクは和合国へは行きません！」
「何じゃと？」
その言葉に唖然とする玉藻様や巴、お松さん。
「ボクを玉藻様の正式な愛玩にしてください」
ボクはそう言った後、玉藻様の前で土下座をした。
「な、何を言ってるのよ龍馬！　玉藻の正式な愛玩になるって……あんた正気！」
ボクは巴の言葉を無視し、玉藻様の答えを唾を飲んで待った。